

クマ剥ぎ



●クマ剥ぎから見えること

越冬後、穴から出たクマは一冬何も食べていないので空腹です。まだ、樹木の新芽や葉もないため、クマは針葉樹の外皮を爪や口で剥ぎ取り、樹皮下の形成層(養分を蓄えた生きている細胞)を歯や爪で削り取って食べます。これを「クマ剥ぎ」と言います。

樹木は冬を越すため、樹体内の糖分を上げて凍らないようにしています。クマはこれを食べるためにクマ剥ぎをしていると言われています。私も口に入れてみました。とても渋く、非常に不味いですが、僅かな甘みを感じます。

母グマは子グマを連れて歩きながらクマ剥ぎを教えます。その時に、大径木のスギだったり、ヒノキだったりを教え、子グマは忠実に教わった樹種を守り続けます。スギを嗜好するクマの家系、ヒノキを嗜好する家系など、母グマから子グマに文化が継承されます。

長いことそんなクマ剥ぎを調査していて、1匹のクマの動向が少し見えてきました。事の始まりは2014年に小さなクマの歯形を確認したことから始まります。



●3本前歯のチビ

母グマの大きな歯形の隣に小さな歯形がありました。不思議なことに3本の歯形です。

右の写真は4本歯の一般的な子グマの歯形で、4本の歯形が分かります。

それまで見てきたクマの歯形は4本の跡がつくのですが、このクマは下の写真のように3本なので「3本前歯のチビ」と呼んで個体識別の材料にしました。

母グマから離れて独り立ちしてからもしばらくは確認できていましたが、2015年を最後に3本前歯の痕跡は途絶えました。その時は、とりあえず元気に独り立ちし、何処かで自分の生活圏を確立したと思いました。

普通のクマ剥ぎ



2014年 3本前歯のチビ



2015年 3本前歯のチビ



2020年 3本前歯



●**帰って来た三本前歯のチビ**
姿を消していた「三本前歯のチビ」と思われる歯形が、2020年から再び確認できるようになりました。5年ぶりの再会です。

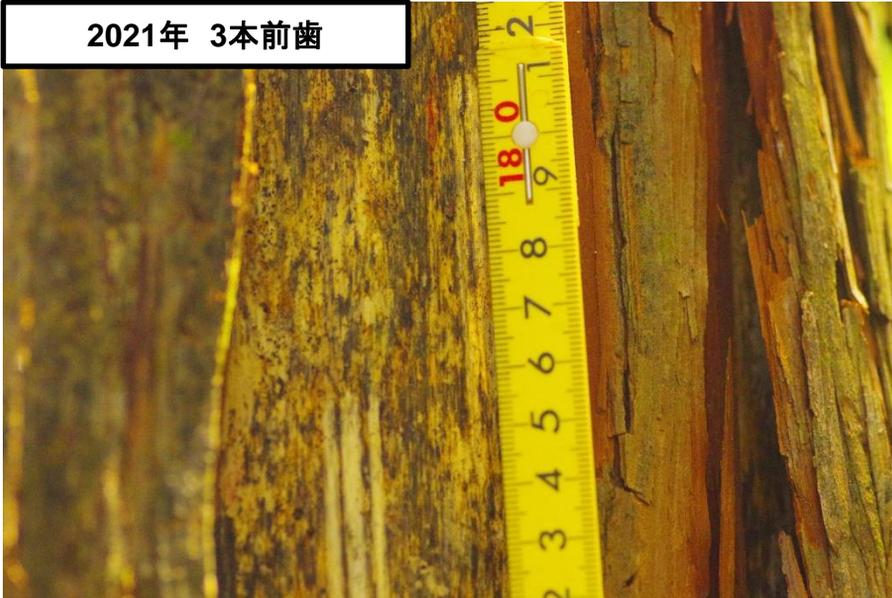
歯形の最上部は高さ180cmほどで、もうチビクマではありません。一番高い所は、たぶん後ろ足を幹にかけて背伸びをしている高さだと思いますが、8歳の大人のクマに成長しています。

子グマのころから痕跡を確認していたクマなので大きく成長した痕跡に感動しました。

クマは行動範囲が広いと言われていますが、西多摩のクマは比較的に行動範囲が狭く、定住傾向が強いと言われています。これまでどこの山域で生活していたか全く分かりませんが、自分が育った山域に帰ってきたと思っています。

さらに、今年(2021年)は「三本前歯のチビ」と思われるクマ剥ぎの近くに、小さなクマ剥ぎがあり、「三本前歯のチビ」が子育てをしていることが分かりました。

2021年 3本前歯



2021年 子グマのクマ剥ぎ



●3本の歯形

これまで確認してきた3本の歯形は、同一のクマのものだと思われます。このクマ、顎の形状に異常があるのか、クマのクセで顔を斜めにして3本の前歯を木に当ててクマ剥ぎをするのか、姿は見えていないので全く分かりません。とにかく、成長しても3本前歯の特徴はなくなっていないません。

●勝手な想像

雌のツキノワグマの性成熟は飼育下で4年とされ、野生化ではもっと時間がかかると言われています。8歳のこのクマ、もしかしたら初産で、初めての子育てを自分が育った環境でと考えて帰ってきたのではないかと勝手に思っています。

あきる野の森の中でも、人知れずにこのようなドラマがあり、ツキノワグマが生息しています。幸いに受傷事故もなく、目撃も少ないあきる野の森(山)ですが、確かにツキノワグマは人と距離をとって生息し、子育てをしています。

【注意】山林内で「クマ剥ぎ」を目にしたときは、そこがクマの生息域だと理解し、速やかにその場を離れてください。

(杉野)